

ドロップネットによるニホンジカの捕獲実証について

～新型シカ捕獲装置「ドロップネット」の本格的な導入に向けて～

八木 祐介（新城設楽農林水産事務所農業改良普及課）

【平成25年3月15日】

【要約】

山間の牧草地をエサ場としているニホンジカ（以下、「シカ」という）を効率よく捕獲するために、「ドロップネット」を導入し実証試験を行った。

赤外線センサー付き自動撮影カメラ（以下、自動撮影カメラ）によってシカの行動をチェックし、わな内に頻繁に出入りしていることが認められたので暗視カメラと「ドロップネット」を用いて捕獲を試みた。3回目の実施で雄1頭を捕獲することができた。活用には課題も多いが、今後の改良によってシカ対策での活用が期待される。

1 目的

愛知県の北東部に位置する北設楽地域は面積に占める山地の割合が多く、近年鳥獣による農作物への被害が問題となっている。特にシカによる被害が増えており、その原因の1つとして栄養価が高い牧草が栽培されている放牧地をシカがエサ場とするため、生息密度の増加に繋がっているのではないかと推測される。生息密度を減らし被害を無くするためには、こういった牧草地での効率的な捕獲方法が求められる。そこで、兵庫県立大学が開発したシカ捕獲装置「ドロップネット」の山間放牧地での導入に向けて実証試験を行なった。

2 展示概要及び実証方法

・ドロップネットの概要

支柱の上に張られたネットを遠隔操作で落とすことで捕獲する囲いわなの一種である。

わな内を撮影する暗視カメラでシカがネット下に入っているかをモニターで確認し、タイミングを見計らってスイッチを押すと遠隔操作でトリガーが作動してネットが落ちる仕組みである（図1）。

新城・北設広域鳥獣害対策協議会がシカ対策として平成23年度鳥獣被害防止総合対策事業で導入し、設楽町津具の和牛繁殖農家の放牧地に設置した。

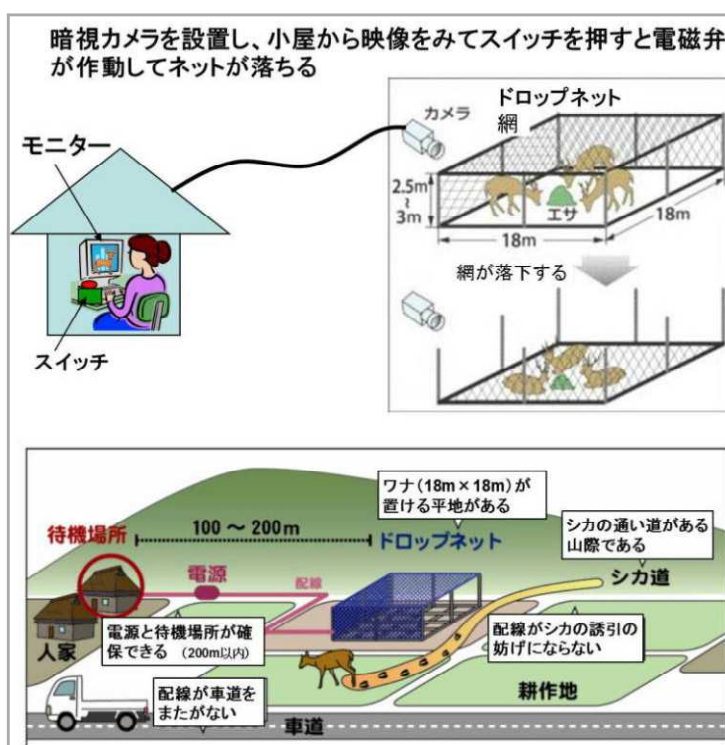


図1 ドロップネット利用方法について

・実証方法

鳥獣害対策実施隊及び鳥獣害対策協議会等の関係機関と協力し、実用化に向けた実証を行った。捕獲までの手順については下記のとおりである。

- ①シカを常時ドロップネットの下に誘引させるため、米ヌカ等のエサをネット下及び周辺に置き、自動撮影カメラで行動を随時チェックした（写真1）。
- ②シカが常時ネットの下に入っているのを確認し、実施隊を始め関係者が捕獲日を調整した。
- ③捕獲当日は、夕方以降からドロップネット近くの小屋で暗視カメラにより継続的に監視を行った。
- ④シカがネットの下に入り捕獲できそうだと判断したら、実施隊員がスイッチを押してネットを落としシカを捕獲した。



写真1 自動撮影カメラで撮影されたシカの群れ



写真2 捕獲された雄シカ

3 結果

米ヌカでシカを誘引しようと試みたが、イノシシが来たため米ヌカによる誘因を中止した。しかし、エサによる誘引を行わなくても、定期的にシカがネット下に入っていることが自動撮影カメラで確認されたので、捕獲日を設定し監視を行った。

平成24年7月3日 16時から翌日7時及び7月5日 16時から20時に捕獲を試みたが、シカが入る様子が確認できなかったため断念した。しかし7月17日 16時から再度試みた結果、20時頃に雄1頭の捕獲に成功した（写真2）。シカはネットに絡まっていたが、破られることはなく無事にと殺することが出来た。

4 考察

（1）誘引について

今回シカを誘引するために米ヌカを撒いたが、イノシシが先に誘引されてしまったためシカが敬遠してしまったと考えられる。なお、実証を行った放牧地ではシカの他にイノシシの出没が確認されているが、イノシシはネットを突き破る可能性があり、ドロップネットによる捕獲は適していない。このため、干し草やサイレージといったシカのみを誘引できるようなエサを使うのが望ましいが、ドロップネット周辺が放牧地であることから、冬期以外はこういったエサによる誘引も難しいと思われる。今後、シカの誘引方法についてさらなる検討が必要である。

（2）ドロップネットの改良について

今回は自動撮影カメラにより日没以降にシカが放牧地に出没している事が明らかになったため、実施隊を始めとした関係者は夜間に暗視カメラによる監視を行い捕獲に取り組

んだ。しかし、この方法では100%出現するとは限らないシカを待ちながら、夜間捕獲のために監視小屋に駐留するという負担を捕獲従事者（実施隊員、農家など）に強いなければならない。今後は作業従事者の負担を減らすため自動落下式にして監視を無くすなど、改良が必要と考えられる。

Copyright (C) 2013, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.